



筑紫女学園大学リポジット

A study on Japanese language textbooks for high school girls compiled by Utako Shimoda

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-03-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 出雲, 俊江, IZUMO, Toshie メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/1095

下田歌子編『新撰女子国文教科書』の特徴に見る 下田歌子の女子教育観についての考察

出 雲 俊 江

A study on Japanese language textbooks for high school girls compiled
by Utako Shimoda

Toshie IZUMO

0. はじめに

下田歌子は、歌人として知られ、また国文学、家政学の研究者でもあったが、生涯一貫して女子教育に関わり続け、文字通り日本の女子教育の礎を築いた人物である。

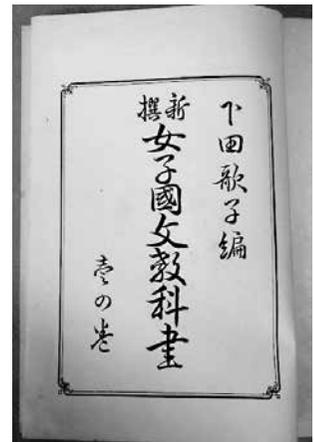
本論は、下田歌子の編著になる高等女学校向け教科書『新撰女子国文教科書』全十巻（1902（明治35）年12月18日発行 大日本図書株式会社）をとりあげ、その特徴を明らかにし、それによって明治30年代以降の下田の女子教育観について考察することを目的とするものである。

下田歌子の女子教育に関わる主たる活動としては、まず1885（明治18）年開校の華族女学校の創設に深く携わり、その年『和文教科書』全三巻を上梓。翌年、華族女学校の校長兼幹事兼教授として勤務の傍ら、1886（明治19）年に『小学読本』全八巻を著している。それから間もなく教育視察として、1893（明治26）年9月より約一年間の欧州視察。帰国後も華族女学校教授及び学監として引き続き勤務した。帰国後その年帝国婦人協会を組織、1899（明治32）年に帝国婦人協会の事業として、実践女学校、同付属慈善女学校、女子工芸学校、同付属下婢養成所を設立している。欧州視察以降下田の関心は上流家庭の子女の教育から、広く女子教育全体へと広がりを見せている。

一方女子教育への関心の広がりとともに、家政学への関心も深まっている。1893（明治26）年に『家政学』を出版、実践女学校設立の翌年の1900（明治33）年には『新撰家政学』を出版している。

本稿が取り上げる『新撰女子国文教科書』は、その二年後、1902（明治35）年5月『少女文庫』全6冊の編集発行に引き続いて、同年1902（明治35）年12月に、高等女学校用の国語読本として発行された。

下田が女子教育と家政学に関わってまいりよその活動を広げていた時期の執筆・編纂であり、この時期の下田の女子教育観を明らかにする上で、重要な資料となるものである。実際の採録内容を丁寧に見てゆくことで、その特徴を明らかにしたい。



検討は、内容構成の特徴と、記述のあり方の特徴の2つに分けて行った。

『新撰女子国文教科書』十巻全体の内容構成の特徴を見てゆくにあたっては、『日本教科書体系 往来篇第十五巻 女子用』に用いられている往来物の分類を用いて、各章の文章を分類することとした。中等教育女子用の教科書には、女子用往来の流れを汲んでの編集方針が見られる。各章の内容を女子用往来の型によって分類することによって、教科書全体の構成上の特徴を明らかにする。

記述のあり方の検討は、同時期の高等女学校向けの教科書から、同じテーマで書かれた章をとりあげ比較考察する。

1. 編纂方針と概要

第一巻「緒言」によれば、この十巻は、「高等女学校及び師範学校女子部等の、国文科」での使用を目的とし、編纂、編纂の方針として、「教育勅語の大御旨に基き、女徳を涵養し、知識を啓発し、各種の文体に習熟して、国文を解し、綴るの階梯たらん事を期する」とされている。第一巻より第四巻までは、全て下田自身の文章である。ただしこの教科書のための書き下ろしだけではなく、それ以前に発表した文書も含んでいる。第五巻以下は、現今及び近世の文を集め、古いものも保元平治以降のものからわかりやすいものを採録したとしている。

2. 構成の特徴

『日本教科書大系 往来篇第十五巻 女子用』解説・解題¹によれば、近世の初めから近代の初頭にかけて撰作ないし編集された女子用往来は、編集意図・方法および内容をふまえて、教訓型・消息型・社会型・知育型の四つの方に分類することが出来るとされている。この四つの型は、往来物それぞれの全体の特徴・編集方針を示したものであるが、本論では各章の文章の内容の分類基準として用いることとした。

四つの型のそれぞれの内容は以下の通りである。

教訓型 道徳やしつけを中心に説いたもの。日常に守るべき心得。

消息型 習字や作文、またこれをとおして社交場の礼儀を教えようとしたもの 手紙文、公式文書・契約書などの書式・処方に習熟させるのをねらいとした。女子用の用文章系は、すべて、移りゆく季節にそくした、また人生や生活の折り目・折り目にともなう行事をテーマに選んだものである。

(1) 消息文例系 あの場合・この葉、あの時・この時に必要な消息文をそのままのかたちで手習わせるのを目標にしたもの

(2) 用文章系 日用文章、実用文章の書き方

社会型 日常社会に弘通する風習・行事・趣味・常識などを記したもの

(1) 社会系 あの場合・この葉、あの時・この時に必要な知識や常識について記したもの

- (2) 年中行事型 五節句をはじめ、四季おりおりに実施される諸行事について、それぞれの由来演技や様相、また営んだり参加したりするさいの心得
- (3) 趣味系 女子が身に付けるべき教養や嗜むべき遊芸について記したもの 詩歌・文学・香・謡・茶道など。

知育型 地理・歴史・産業はじめ、さまざまな知識を授ける目的で編まれたもの

- (1) 地理系 地理に関わる知識を与える目的で編集されたもの
- (2) 産業系 農業・工業・商業ないしは家庭実技にたずさわるさいの知識や技術、あるいは心得
- (3) 合本系 日常生活総合百科事典的な体裁 娘の時期から嫁の時代にかけて、たえず座右におかれ、あの場・この場、あの時・この時の必要にそくして利用される参考書ないし百科事典にも似た役割

どの巻にも含まれる紀行文は、知育（地理）に分類した。上述の教科書大系解説・解題によれば、紀行文は、女子に地理にかかわる知識を与える目的で編集された往来物の伝統があり、知育に分類されていることになった。下田編纂の教科書も、その伝統をふまえたと思われるためである。他に、各型の複合の目的を含むと思われるものも多数あったが、その都度恣意的に判断した。

<章題と分類>

各巻の章毎に分類作業を行い、分類一覧表を作成した。下田に特徴的な「手芸」と「歌」について触れている章には備考に記載した。一卷から十巻までの章題と分類の表を示す。

章題と分類一覧表（旧字体は新字体に変更）

第一巻	章題	筆者・作者	分類	備考
第1	学校の起源	下田歌子	社会(行事)	
第2	孝と虫と	下田歌子	教訓	
第3	孝女父に配所に従ふ	下田歌子	教訓	
第4	恩賜の御衣	下田歌子	教訓	
第5	身を殺して仁を成す	下田歌子	教訓	
第6	我が身は第一の宝なり	下田歌子	教訓	
第7	医は選ばざる可らず	下田歌子	社会	
第8	書簡文を書く心得	下田歌子	消息	
第9	安著を報ずる文	下田歌子	消息	
第10	人の住居を問ふ文	下田歌子	消息	
第11	算術	下田歌子	知育	
第12	貿易	下田歌子	知育	
第13	葡萄牙人との貿易	下田歌子	知育	
第14	琉球国	下田歌子	知育(地理)	
第15	日本人外国の政を執る	下田歌子	知育	
第16	農業	下田歌子	知育(産業)	
第17	粒々皆辛苦	下田歌子	教訓	
第18	夕顔畑	下田歌子	社会	
第19	養蚕	下田歌子	知育(産業)	
第20	春の人事(今様)	下田歌子	社会	
第21	裁縫	下田歌子	知育(産業)	
第22	仕立物依頼の文	下田歌子	消息	手芸
第23	同じ返事	下田歌子	消息	
第24	盲女の手工	下田歌子	社会	
第25	女生徒の心得べき事	下田歌子	教訓	
第26	虚言を戒むべき事	下田歌子	教訓	
第27	廉潔	下田歌子	教訓	
第28	京都の飢人	下田歌子	教訓	
第29	犬子猫を育む	下田歌子	教訓	
第30	孝女能く女兒を教育す	下田歌子	教訓	
第31	紡績	下田歌子	知育(産業)	
第32	機織	下田歌子	知育(産業)	手芸
第33	少女の勤学	下田歌子	教訓	手芸
第34	就学届	下田歌子	消息	
第35	入学願	下田歌子	消息	
第36	欠席届	下田歌子	消息	
第37	少女の学科	下田歌子	消息	

第38	画学	下田歌子	社会	
第39	習字	下田歌子	社会	
第40	ふたつ文字	下田歌子	教訓	

第41	強情の罰	下田歌子	教訓	
第42	少女と婢僕と	下田歌子	教訓	
第43	針は小なれども鋭利なり	下田歌子	教訓	

第二巻	章題	筆者・作者	分類	備考
第1	少女の一月	下田歌子	社会(行事)	
第2	軽気球	下田歌子	知育	
第3	年始の文	下田歌子	消息	
第4	同じ返事	下田歌子	消息	
第5	仁恕博愛	下田歌子	教訓	
第6	西班牙幼王跛女を憐む	下田歌子	教訓	
第7	孝女ため	下田歌子	教訓	
第8	孝女の感化	下田歌子	教訓	
第9	雪国のはなし	下田歌子	教訓	
第10	和蘭女王の雪合戦	下田歌子	教訓	
第11	雪中友をとふ文	下田歌子	消息	
第12	礼讓	下田歌子	消息	
第13	孝あり礼あり	下田歌子	教訓	
第14	自治及び不撓の精神	下田歌子	教訓	
第15	忍耐の力	下田歌子	教訓	
第16	蒸気機関	下田歌子	知育	
第17	汽船汽車	下田歌子	知育	
第18	汽船の歌(今様)	下田歌子	社会	
第19	同胞	下田歌子	教訓	
第20	少女白刃のもとに兄を救ふ	下田歌子	教訓	
第21	女子の手芸	下田歌子	知育(産業)	手芸
第22	刺繍	下田歌子	知育(産業)	手芸
第23	其二	下田歌子	知育(産業)	手芸
第24	編物	下田歌子	知育(産業)	手芸
第25	自製の繡物を贈る文	下田歌子	消息	手芸
第26	同返事	下田歌子	消息	手芸
第27	加賀の千代女	下田歌子	教訓	
第28	みちのくの名所	下田歌子	知育(地理)	歌

第三巻	章題	筆者・作者	分類	備考
第1	白金黄金	下田歌子	教訓	
第2	勤勉は幸福の母なり	下田歌子	教訓	
第3	夏季休業	下田歌子	社会(行事)	
第4	夏季休業中旅行に友を誘ふ文	下田歌子	消息	
第5	同じ返事	下田歌子	消息	
第6	少女の海水浴	下田歌子	社会	
第7	渡頭の舟	下田歌子	教訓	
第8	衣服	下田歌子	社会	家政
第9	住宅の掃除	下田歌子	社会	家政
第10	女皇の芝居小屋	下田歌子	教訓	
第11	移転を報ずる文	下田歌子	消息	
第12	庭園	下田歌子	社会	家政
第13	植物学	下田歌子	知育	
第14	日光観楓の記	下田歌子	知育(地理)	歌
第15	其二	下田歌子	知育(地理)	歌
第16	其三	下田歌子	知育(地理)	歌
第17	臆病者の大負傷	下田歌子	教訓	
第18	忍耐	下田歌子	教訓	
第19	善小なりと雖もせざること勿れ	下田歌子	教訓	
第20	敬神の観念	下田歌子	教訓	
第21	愛国	下田歌子	教訓	
第22	故郷の友に送る文	下田歌子	消息	
第23	地理	下田歌子	知育(地理)	
第24	旅の歌	下田歌子	知育(地理)	歌
第25	室内旅行	下田歌子	教訓	
第26	能因法師	下田歌子	社会	歌
第27	園中の都府	下田歌子	教訓	
第28	小姑の心得	下田歌子	教訓	
第29	紀行文の心得	下田歌子	社会	
第30	浦つたひ	下田歌子	知育(地理)	
第31	秋の人事(今様)	下田歌子	社会	

第四巻	章題	筆者・作者	分類	備考
第1	女子の慈善心	下田歌子	教訓	
第2	思禽獸に及ぶ	下田歌子	教訓	
第3	少婦の好模範	下田歌子	教訓	
第4	動物学	下田歌子	知育	
第5	動物園に友を誘ふ文	下田歌子	消息	
第6	同じ返事	下田歌子	消息	
第7	心の錦	下田歌子	教訓	
第8	容儀	下田歌子	社会	
第9	少女のたしなみ	下田歌子	社会	
第10	母徳	下田歌子	教訓	
第11	ルキザ后幼児を励ます	下田歌子	教訓	

第12	楠公夫人の碑文	下田歌子	教訓	
第13	庭の訓(今様)	下田歌子	教訓	
第14	訪問の客	下田歌子	社会	
第15	招待状の返事	下田歌子	消息	
第16	料理の心得	下田歌子	社会	家政
第17	皇女の割烹	下田歌子	教訓	
第18	割烹教授問合せの文	下田歌子	消息	
第19	鉱物	下田歌子	知育	
第20	珠崖の少女	下田歌子	教訓	
第21	造花押絵	下田歌子	知育(産業)	手芸
第22	装束の色目	下田歌子	知育(産業)	手芸
第23	女子の心用ひ	下田歌子	社会	手芸

第24	詠歌の葉自序	下田歌子	社会	
第25	添削依頼の文	下田歌子	消息	
第26	坂路の石	下田歌子	教訓	
第27	都会の女子	下田歌子	教訓	
第28	地方の女子	下田歌子	教訓	

第29	陣頭の花	下田歌子	教訓	
第30	臥龍岡（今様）	下田歌子	教訓	
第31	外の漬つと	下田歌子	知育(地理)	
第32	其二	下田歌子	知育(地理)	
第33	其三	下田歌子	知育(地理)	

第五卷	章題	筆者・作者	分類	備考
第1	皇后陛下御盛徳の一端	細川潤次郎	教訓	
第2	其二	細川潤次郎	教訓	歌
第3	皇后宮御誕辰	細川潤次郎	教訓	
第4	言文一致	三輪田眞佐子	知育	
第5	書簡の解	中村郁香	消息	
第6	女子書簡文の起源	中村郁香	消息	
第7	鷹信	秋山四郎	教訓	
第8	友の果物をおこせたる返事	税所敦子	消息	
第9	婦人の慈悲	三輪田眞佐子	教訓	
第10	少女の慈悲心	婦女鑑	教訓	
第11	世帯の事	福沢諭吉	社会	
第12	女子と裁縫と	三輪田眞佐子	社会	手芸
第13	家事の時に二人の婦人心得方の異なる事	福沢諭吉	教訓	
第14	不注意なる母親	細川潤次郎	教訓	
第15	内助の功	婦女鑑	教訓	

第16	趾行動物	鳥山啓	知育	
第17	掣肘	秋山四郎	教訓	
第18	矛盾	秋山四郎	教訓	
第19	心おごりすな	細川潤次郎	教訓	
第20	淀のわたり	井上通女	教訓	
第21	御幸山供奉の記	坂正臣	知育(地理)	歌
第22	其二	坂正臣	知育(地理)	歌
第23	五十歩百歩	秋山四郎	社会	
第24	肉食蹴行動物	鳥山啓	知育	
第25	塞翁が馬	秋山四郎	教訓	
第26	蛇足	秋山四郎	教訓	
第27	伯楽	秋山四郎	教訓	
第28	歴山王母君に事へし事	福沢諭吉	教訓	
第29	賤女の忠志	細川潤次郎	教訓	
第30	御園の菊	鳥山啓	知育	歌
第31	其二	鳥山啓	知育	歌
第32	其三	鳥山啓	知育	歌

第六卷	章題	筆者・作者	分類	備考
第1	天長節日	細川潤次郎	社会(行事)	
第2	下田の刀自が講話の大意を記す	関根正直	社会(行事)	歌
第3	秋懐	加藤千蔭	社会(行事)	歌
第4	十五夜	日本歳時記	社会(行事)	
第5	呉牛月に喘ぐ	秋山四郎	教訓	
第6	牛耳を執る	同上	社会	
第7	食虫動物	鳥山啓	知育	
第8	三舎を辟く	秋山四郎	社会	
第9	家事経済	三輪田眞佐子	教訓	家政
第10	進物	貝原篤信	社会	
第11	山内一豊の夫人	新井君美	教訓	
第12	主客の心得	松平定信	社会	
第13	国の裝飾	福沢諭吉	社会	
第14	女子に与ふる書	東條琴台	教訓	
第15	魚類	鳥山啓	知育	
第16	電気鱈	同上	知育	
第17	牛乳種痘	近藤芳樹	知育	
第18	早起	女論語	教訓	
第19	村民の慈母	婦女鑑	教訓	

第20	書簡に用ふる候といふ字の事	中村秋香	社会	
第21	歳暮友のもとへ	税所敦子	消息	
第22	白色の壁	細川潤次郎	社会	
第23	月花の弄と国文教育と	井上毅	社会	
第24	徳川時代の女学	佐藤誠実	社会	
第25	女博士	婦女鑑	教訓	
第26	大鏡を読みて思へる事ども	小中村清矩	教訓	
第27	烟草の説	坂正臣	社会	
第28	酒の害	津田仙	社会	
第29	青梅の俳句	細川潤次郎	社会	俳句
第30	をぢの大徳の一めぐりに悲める詞	荷田たみ子	社会	歌
第31	二豎	秋山四郎	社会	
第32	貞婦能く夫の難病を救ふ	婦女鑑	教訓	
第33	井伊直弼におくれる文	駿河局	消息	
第34	名所鶯	小出榮	知育(地理)	
第35	土佐侍従の君の女君より賜はりける紅梅をめづる詞	荷田蒼生子	消息	歌
第36	吉野行啓	小出榮	知育(地理)	歌
第37	其一	同上	知育(地理)	歌

第七卷	章題	筆者・作者	分類	備考
第1	紀元節	久米幹文	社会(行事)	
第2	日本赤十字社	佐野常民	知育(産業)	
第3	競争	萩野由之	社会	

第4	身を捨て人を救ふ	伴蒿蹊	教訓	
第5	雑遊	関根正直	社会(行事)	
第6	石山詣	小池道子	知育(地理)	歌
第7	山里に花を見る記	村田春海	社会	歌

第8	惜花	井上文雄	社会	
第9	小欲は大損	細川潤次郎	教訓	
第10	羈中の山	八田知紀	知育(地理)	歌
第11	汽車	飯田武郷	知育(産業)	
第12	猫の属	鳥山啓	知育	
第13	鱧脚動物	同	知育	
第14	推敲	秋山四郎	社会	
第15	儉約訓	松平定信	社会	
第16	废物利用	細川潤次郎	知育(産業)	
第17	杞憂	秋山四郎	社会	
第18	涙の水茎	婦女鑑	教訓	
第19	修身論	松本直秀	教訓	
第20	一つ宛勤めて事を仕遂げよ	貝原篤信	教訓	
第21	楠木正成が伝の賛	下河邊長流	教訓	
第22	顰に做ふ	秋山四郎	教訓	
第23	鳥の化石	鳥山啓	知育	
第24	盆石	本居太平	社会	歌
第25	泊泊舎の記	村田春海	社会	
第26	常に友がきにさとしける詞	賀茂真淵	知育	

第27	貧女の廉潔	婦女鑑	教訓	
第28	母の鑑	婦女鑑	教訓	
第29	婚礼を祝ふ詞	僧契冲	消息	歌
第30	侍女千代女に代わりて其夫へ送りたる文	小野通女	消息	歌
第31	漁村	中島廣足	知育(産業)	
第32	磯づたひ	只野綾女	知育	歌
第33	古戦場	井上文雄	社会	
第34	蘆の湖の御遊	三輪義方	知育	歌
第35	月前納涼	本居宣長	社会	
第36	幽栖秋来	中島廣足	社会	
第37	初鴈	同	社会	
第38	遊水類	鳥山啓	知育	
第39	歌の葉の序	小中村清矩	消息	
第40	千歳筐の跋	村田春海	社会	
第41	政弼君をいたみ奉る文	荷田たみ子	消息	歌
第42	駿河大納言の事	新井白石	知育	
第43	寛永の頃の江戸風俗	太宰純	知育	

第八卷	章題	筆者・作者	分類	備考
第1	孝明天皇	細川潤次郎	社会	
第2	朝賀	河内荻子	社会	歌
第3	御垣の下草の序	高崎正風	社会	
第4	唱歌	太宰純	知育	
第5	和琴	本居宣長	知育	歌
第6	花と虫と	関根正直	知育	
第7	蜜蜂	細川潤次郎	知育	
第8	萩をめづる記	村田春海	社会	歌
第9	山里の月を見る記	加藤千蔭	社会	歌
第10	依月客来	本居宣長	社会	歌
第11	八月なかば幸子がゆあみに行くを送る	加藤千蔭	消息	歌
第12	まがきの朝貌	税所敦子	消息	歌
第13	なでしこ	同上	消息	歌
第14	寡婦能く亡夫の遺志を嗣ぐ	婦女鑑	教訓	
第15	神方升子の詠草の奥書	香川景樹	社会	
第16	歌と旅況の変遷	中村秋香	社会	
第17	旅行	足代弘訓	知育	歌
第18	熱田の宮	藤原実晴の母	知育	歌
第19	矢部久子におくれる	伴蒿蹊	消息	
第20	初冬時雨	本居宣長	社会	

第21	冬旅行	香川景樹	知育(地理)	歌
第22	小笠原島	黒川春村	知育(地理)	
第23	廣澤山荘の記	大橋氏の女	知育(地理)	歌
第24	某女の卒業を祝ふ文	久米幹文	消息	
第25	子女の教育	松平定信	教訓	
第26	源烈公俊素を守り給ふ	藤田東湖	教訓	
第27	細川幽斎文武の誉	新井君美	社会	歌
第28	平泉の古戦場	松尾芭蕉	社会	俳句
第29	嵐蘭が詠	同人	社会	俳句
第30	女子の俳句		社会	俳句
第31	書き物依頼の文	税所敦子	消息	
第32	師の説になづまざる事	本居宣長	教訓	
第33	細井廣澤の信義	伴蒿蹊	教訓	
第34	米屋と右衛門の陰徳	同人	教訓	
第35	君臣	栗田寛	教訓	
第36	凌雲閣に登る	木村正辞	教訓	
第37	左衽の服	藤井高尚	社会	
第38	楠木正成の銅像	関根正直	知育	
第39	水郷春望	本居宣長	社会	
第40	柳	同人	社会	
第41	花の評	同人	社会	

第九卷	章題	筆者・作者	分類	
第1	宮城御移転の記	税所敦子	社会	
第2	近世婦女の歌		社会	歌
第3	文字かく心得	本居宣長	消息	
第4	手簡文の文字の事	羽山尚徳	消息	
第5	墓参	香川景樹	社会	歌

第6	母のかたみ	同	社会	歌
第7	ものずき	林衡	教訓	
第8	茶道	中山三柳	社会	
第9	絵画	同	社会	
第10	文書	同	社会	
第11	野山の獄中より妹に送りたる文	吉田松陰	消息	歌

第12	恵の露の序	近衛忠照	教訓	
第13	婦人の真勇	婦女鑑	教訓	
第14	貞烈の光暴君の悪徳を消磨す	同	教訓	
第15	才芸ある婦人	伴蒿蹊	教訓	
第16	今世婦女の歌	御垣の下草	社会	歌
第17	其二	柳のつゆ	社会	歌
第18	月夜子規	村田春海	知育(地理)	歌
第19	女訓	佐久間象山	教訓	
第20	其二	同	教訓	
第21	其三	同	教訓	

第22	知あれば人を恨まず	貝原篤信	教訓	
第23	婦女の心得	加賀の千代女	教訓	
第24	母の慈愛	瀧沢馬琴	教訓	
第25	其二	同	教訓	
第26	姉妹の孝女	柳沢淇園	教訓	
第27	松のさかえ	税所敦子	社会	歌
第28	其二	同	社会	歌
第29	乳母の文	阿仏尼	消息	
第30	其二	同	消息	
第31	其三	同	消息	

第十卷	章題	筆者・作者	分類	備考
第1	神武天皇の御陵	細川潤次郎	社会	
第2	有徳の君	北畠親房	社会	
第3	武蔵相模	菅原孝標の女	知育(地理)	地理
第4	富士足柄	同	知育(地理)	地理
第5	今様柴の戸	本居宣長	社会	文芸
第6	紅葉の事	平家物語	社会	
第7	嵯峨野の秋	同	社会	
第8	新参の侍	古今著文集	社会	歌
第9	鳥羽絵	橘成季	知育(地理)	
第10	もみぢ葉	宗良親王	知育(地理)	歌
第11	かしまだち	阿仏尼	知育(地理)	歌
第12	都のたより	同	社会	歌
第13	松下禅尼	卜部兼好	教訓	歌
第14	息女への文	西三条実條の室	消息	
第15	中古婦女の歌		社会	歌
第16	我が子婦のわが著述助けし話	瀧沢馬琴	教訓	歌
第17	太閤秀吉の夫人	雨森芳洲	教訓	

第18	雪月花	卜部兼好	社会	歌
第19	家にありたき木	同	社会	歌
第20	国学	佐藤誠実	知育	歌
第21	其二	同	知育	歌
第22	建武中興論	井上教	知育	
第23	顯家卿の北方	松翁	社会	歌
第24	伊賀局	同	社会	
第25	壬申の乱	源隆國	社会	
第26	尊の親征	北畠親房	社会	
第27	旅宿	菅原孝標の女	知育(地理)	旅
第28	大地震	平家物語	社会	
第29	火災	鴨長明	社会	
第30	遷都	同	社会	
第31	芳子への文	香川景樹	消息	歌
第32	花はさかり	卜部兼好	社会	
第33	井手の山吹と蛙	鴨長明	社会	
第34	落花	松翁	社会	歌
第35	春のわかれ	ます鏡	社会	歌

<分類の集計>

各巻ごとの分類数を一覧にしたものが以下である。

『新撰女子国文教科書』内容分類

	教訓	消息	社会	知育			章の数
				地理	産業	その他	
第一巻	17	9	7	1	5	4	43
第二巻	12	6	2	1	4	3	28
第三巻	12	4	8	6	0	1	31
第四巻	15	5	6	3	2	2	33
第五巻	18	3	3	2	0	6	32
第六巻	9	3	18	3	0	4	37
第七巻	9	4	15	2	4	9	43
第八巻	8	6	17	3	0	7	41
第九巻	13	6	11	1	0	0	31
第十巻	3	2	21	6	0	3	35

これを、例えば同じく高等女学校用読本教科書で先行して使われていた『女子日本読本』上篇第一、第二（新保磐次著、1895（明治28）年発行 金港堂書籍）と比較してみよう。

『女子日本読本』内容分類

	教訓	消息	社会	知育			章の数
				地理	産業	その他	
上篇第一	8	1	5	0	2	8	24
上篇第二	6	3	4	2	2	9	26

この比較から下田編纂の『新撰女子国文教科書』の内容構成上の特徴として見えてくるのは以下の点である。

- ・「知育」（知識を授ける型のもの）が少ない。
- ・一～五巻「教訓」を多く採録している。
- ・六～十巻「社会」を多く採録している。
- ・「消息」が一貫して採録されている。

3. 記述の特徴

次に記述の特徴を見てみたい。

方法として、当時の高等女学校向けの教科書から、同じテーマで書かれた章を取り出し、記述のされ方について比較を行う。比較対象として再び『女子日本読本』上篇第一、第二（新保磐次著、1895（明治28）年発行 金港堂書籍）を用いる。

①「養蚕」

両書とも上の分類表では「養蚕」はいずれも知育（産業）として分類されるが、内容は全く異なっている。

『女子日本読本』では、養蚕についての知識や方法が具体的に得られる内容となっているのに対し、『新撰女子国文教科書』では、養蚕の歴史と意義を述べた上で、取り組み上の注意点を示し、その容易さを述べたうえで実施を推奨するという内容である。また取り組みによる教育的意義が示されている。引用文中の下線は以降全て稿者によるものである。

『女子日本読本』 上篇第一 「養蚕紡績」

蚕を養ひて繭を作らしめ、繭より糸を紡ぎて絹糸となす。其の手續きのあらましを知るは面白く且有用のことなり。

桑の葉の初めて生ずる頃を計りて蚕卵紙を温かなる処に置けば、卵より小き小虫生まる、之を蟻蚕と云ふ。桑の若芽を摘み並べたる器の上に鳥の羽を以て此の蟻蚕を掃き落とす、これを「履き立て」と云ふ。

さて蚕は桑を食ひて生長し、七日または十日ごとに一度皮を脱ぐ、其の時は絶食して眠るが如し、之を「第一眠」「第二眠」等と称す。第四眠を終へてより八、九日又は十一、二日の間に蚕は繭を作りて、之に籠もる。其の時を計り、「まぶし」とて藁を折かがめたるものの中に移して繭を結ばしむ。（後略）

『新撰女子国文教科書 巻一』第十九「養蚕」

養蚕の業は、我が邦、神代の頃より開け、応仁の朝に至りて、著く進歩せり。斯くて後も、歴世、其が良方を、遠く、三韓、支那などに求めて、庶民にも教へさせ給ひしのみならず、椒房の裡にも、蚕窓を開きて、后妃御親ら、蚕飼ひの業をせさせ給ひしより此方、今に至る迄、治乱さまごまの世を通して、盛んに全国都鄙に行わる。畏こけれども、当今明治の大御代にも、皇太后の宮、皇后の宮ともに、御園に蚕室を造らしめ給ひ、こゝらの少女を集へて、蚕事に勞かしめ給ひき。いと忝なき事にこそ。

抑も、蚕桑は、我国の地味にあへる産物にして、国の富源も、是よりぞ湧き出づるなる。

されば、蚕事は、其専門の人々の良法を尋ね、研究を積みて、もて能く、其業の榮ゆくことを計るべきは、云ふも更にて、農家に在りては、耕耘の暇には、此処彼処、空地の有らん限りは、むねと、桑樹を植ゑ、婦女をして、もはら、蚕飼ひせしめなば、程々につけて生計の補けともなるべし。又都会に住めるともがらも、余裕あらん人の妻子どもは、花園の一部を割きて桑圃とし、蚕を飼ひ、糸をとり、あるは絹帛を織るなどの業をつとめば、一つには、運動ともなり、かたへは、長き日の徒然をも慰むべし。さるは、満身の綺羅も、其成れる始めを思ひ知りて、力色の人の勞きを憐み、おのづから驕りをとゞむるたよりともなりなん。はやくより、畏きわたりに、さる業せさせ給ひしも、世の人の見習へかしとにやありけん。能く思はまほしき事にこそ。

さて、蚕室は、温度の加減、空気の流通、なべての方法完きを善しとはすれども、注意まめやかならば、常の居室にても、大かた、好き成績を得べきものなり。凡そ、蚕を飼ふは、猶人の子を養ふが如し。育つる人寒からば暖め、熱からば涼しうし、食を足し、居を安くし、いとほしと思ふ真心もて生ふし立つれば、蚕は肥ふとりて、健かならん事疑ふべからず。斯く懇ろに、心を用ふれば殊にしつらへたる蚕室ならでも、はた、経験の未だしき者にて、大やう、蚕を飼ふことを得るなり。

②編物

『女子日本読本』では、「編物」についての知識や方法が具体的に得られる内容となっている。また「編物」は楽しみとしてのみ位置づけられている。

『新撰女子国文教科書』では、編み物の面白さを述べてとりくみを勧める（上の傍線部分の）他に、とり組むにあたっての生徒の衛生への注意（中の傍線部）がある。ここに見られるように、読み手の生徒を、読み手としてだけでなく内容にかかわっての実施者として位置づけることはこの教科書を通じてみられる特徴である。また下の傍線部には、家政に関わる取り組みを教育として捉えていることが見える。下田歌子においては、家政学が女子の人格陶冶に直接つながるものとして位置づけられていることがここにも見て取れる。

『女子日本読本』上篇一「編物」

編物は稍太き糸を以て手袋、靴下等を編む手わざにして女子の幼き時最好みてすることなり。之に用ふる糸は毛糸とて、獣の毛を紡ぎ手色色の美しき色に染めたるものなり。

毛糸を編むに用ふる機械は数本の針のみなり。針はつむ針とかぎ針の二種あり。つむ針は真直なる針にして、手袋、靴下、腕はめ等を編むに用ひ、鉤針は一端にかぎ有るものにして、帽子、肩掛け、涎掛け、巾着、又は肘突き、花瓶敷きなどを編むに用ふ。

編み目は大凡メリヤスの荒く太きが如くなれども、編み方によりて種々の巧みあり、七宝、市松、麻の葉を始め、松葉、菊花、藤の花などを編み出だす。又梅、菊、牡丹などの一輪を編みて飾りに用ふることあり。

市中に売買する手袋、靴下等は大抵大きな器械にて編みたるものにして、一台の器械を以て一日に

数百対を編むことを得るが故、値も割り合ひに安し。されば忙しき人の強いて編み物をするは要なき事なれど、暇有る時の慰みに作り置きて、自も用ひ、人にも贈る時は後後までも思ひ出だし言ひ出だす種になりて亦一つの楽しみなり。

『新撰女子国文教科書』第二卷 第二十四 「編物」

編物は、早くより、吾が邦に於いても、女子の手工として、修めたりしなり。然れども、現今行はるゝものゝ如く、精巧にして、且許多の種類ありしにはあらず。唯、網、及び網製、網紐等、又、稀には、夏の汗取、肌着を造りしに過ぎざりけんを、近来泰西の編物の法を伝へて、今は、吾が新工夫の編みかたをも交へてやうやう、此手芸も進みに進みもて行くに至れり。故に、其精巧なるものは、殆ど、織物に類似して、其れよりも、尚、手際よきを感じずる類ひ無しとせず。原来、本邦人は、指頭の業、極めて巧みなれば、斯うやうの術は、いやましに、発達するに至るべし。

編物は、其方法の一わたりを習ふ時は、他は、大方同じやうのしかたにて、変化多からざるものなれば、年少の女子にも学び易く、其を心得置く時は、手袋鞆、などを編みもし、破れたるを繕ふに、人手を借らで用足るべければ、正課の暇々には、よりより、修めしむべきなり。

然れども、編物は、紅紫青白、各種の糸を以て、各種のかたちを網なすものなる故に、幼き少女たちは、悦び楽しみつゝ、飽く事志らず弄ぶなり。さるからに、ようせずば、編みかけたる所を、目的の箇所迄、編み果てんなどと思ひて、寸陰を惜み、日暮、薄昏き所にて、眼に近くさしつけなどして、編むことありて、やゝもすれば視力を害し、且、頭を前面に俯け屈むる等の弊を生じて、知らず知らず、身体を害すること無きにしもあらず。能く注意すべし。(中略) 其れ、格別、有用ならずとも、五色とりどりの糸屑は、幼き人の遊びの料ともなるべし。細小の物も、積りもて行くを見ては、幼稚なる者の心にも、いと惜しく覚えて、取り捨てがたくなるものぞかし。是れ、一芸を授けて一得を養ふものにして、他日、其少女等が、主婦となるに及びて、家事経済の注意を惹き起す一端となるべし。(後略)

③ 「新年」

『女子日本読本』では、新年の一般的な風景を述べ、新年に際しての教訓的内容が述べられている。『新撰女子国文教科書』では、学習者である女子学生が新年を過ごす様子が描かれている。

この中で何より面白いのは、下田の文章になる一月の少女達の元気の良さである。「我を忘れて走り来る」「顔に物を塗られ、若き男などに追ひまはさるゝ」などの元気のよい様子が描かれており、大人として顔をしかめて見せつつも、元気の良い少女達を微笑ましくも見ていることが伝わる文章となっている。この後には、かるたに熱中するあまり夜更かししたり、負けに腹立って、泣いたり恨みを言ったりすることをたしなめる部分がある。活発でいきいきした少女達の姿が描かれている。

『女子日本読本』上篇二 「新年」

新年ほど嬉しき時はなし。年の内にも、餅撒き、門松たてなどするほどより早くも心春めきぬ。(中略) それより外に出て、男は凧をあげ、女は鞠を打ち、羽根つき冬の日の暮れ易きを惜しむ。

然れども新年の事はただ羽根つき鞠打ちにて尽きたるに非ず。年一つ長ずれば一年だけの考へを増すべし。されば去年の事を心の中に繰り返し、善かりし事は益励み、悪しかりし事は改めんことを思ひ、務め今年の計を立つべし。「一年の計は元旦に在り」とは是れを謂ふなり。

『新撰女子国文教科書』巻二 「少女の一月」

(前略) 斯く楽しき時節に楽み多き少女の寄りつどひて楽しむは、何事ならんとて、まづ、其遊戯の重なる種類を数へ見るに、羽根、鞠、かるた等は、最も此時にあへる遊びにて、其他、時をもわかずもてはやさるゝものも、亦、少なからざるべし、然るに、追羽根は、大抵戸外に出で、空を仰ぎてする業なれば、随分、よき運動にて、衛生法にも叶へども、まだ一向に年若き少女の車馬織るが如き衢に立ちて、遣り交し、我を忘れて、走り来るふは危し。また殊に、年ごろの女子が、打ち負けたりとて、顔に物を塗られ、若き男などに追ひまはさるゝは、分けて、外見宜しからず。遊ぶときは、心のゆく限り遊ぶがよし。笑ふも戯るゝも、飛ぶも、走るも、悪しとはあらねど、女子は女子らしく、優美閑雅の趣を失はで、打ちくつろぎたる中にも、侮り憎きけはひぞあらまほしき事なる。(後略)

④ 「教訓」の女性達

「教訓」として挙げられている物語や実在の女性達は、学習者である少女達の理想とすべき人物として描かれている。彼女らは皆非常にたくましく、それぞれ非常に意志的に、志強く生きる者として描かれている。いずれも女子が、男子とは別の役割を担う存在として描かれているという限界はありつつ、健康で、主体的に意志強く生きる女性のエピソードが、女生徒に求める理想像として示されている。

4. 特徴のまとめ

本稿の成果として、ここまでに確認できた『新撰女子国文教科書』の特徴をまとめておく。

女子用往來の4分類「教訓型」「消息型」「社会型」「知育型」によって各章を分類したことから見えてきた構成の特徴は以下のとおりである。

- ・ほとんどすべての巻に「消息」や「地理」の学びとしての紀行文を含むなど、伝統的な女子用往來の形式に則ろうとする様子が見える。
- ・一～五巻には、道徳や生き方を示す「教訓」にあたる内容が多い。
- ・六～十巻には、社会生活を送るための知識や常識、年中行事や趣味などを記す「社会」にあたる内容が多い。
- ・全般に、知識を授ける「知育」にあたる項目が少ない。

また、記述の内容やあり方の特徴は以下のとおり。

- ・「教訓」として分類される物語やエピソードに描かれているのは若い女性であるが、いずれもそれぞれにたくましく、主体的に意志強く生きる女性の姿である。
- ・「知育」の記述は、それに関する知識や方法の記述よりも、学習者との関係のあり方、取り組むべき内容が示され、取り組み上の心構えや注意点などが述べられている。
- ・「知育」(産業)と分類される家政などの記述では、取り組みにあたっての衛生、健康に関する記述が多く見られ、学習者が取り組むこと前提をとした記述となっている。家政にかかわる行為への取り組みは、教育として位置づけられている。

ここに見るように、物語では、意志を持って生きる女性像が理想として描かれ、知識技能の伝達

においては、学習者である女子生徒が主体として取り組むことを前提とした記述となっている。

『新撰女子国文教科書』は、学習者である女子を主体性をもって行動する存在として位置づける点が顕著な特徴であり、そこに下田歌子の女子教育における考え方が表れているといえる。

5. 今後の課題

本稿では、『新撰女子国文教科書』の特徴を整理して示すにとどまった。今後の関心事としてはこの教科書にも見える「家政」についてがある。下田歌子の手芸論についてまとめたものとして山崎明子『近代日本の「手芸」とジェンダー』（2005 世織書房）があるが、そこでは「手芸」がジェンダーとしての女子形成の役割を果たすものと位置づけられている。しかし教科書に見える下田歌子の手芸は、学習者である女子に主体性と、社会への視線と実質的な影響力を養うものとして描かれている。下田における家政学と教育との関連は、これから明らかにされるべき点であると考えられる。

また本稿では全く触れられなかったが、歌人でもある下田歌子にとって、教育の場面での「歌」の意義についても研究してゆきたい。これはこれまであまり触れられてこなかった分野である。『新撰女子国文教科書』における歌の掲載は、学年を追う毎に増える構造になっており、また随所に自身の、当時まだまだ広く行われていた題詠にはこだわらないのびやかな歌作の態度が示されている。女子教育としての下田歌子の「歌」の位置づけについては今後の大きな研究課題である。

【注 および参考文献】

注1 石川松太郎「解説・解題 二 女子用往來の諸類型と発達過程」（石川松太郎編纂『日本教科書体系 往來篇 第十五卷 女子用』昭和48年6月 講談社）

石川松太郎編纂『日本教科書体系 往來篇 第十五卷 女子用』昭和48年6月 講談社

税所敦子篇『明治文学全集 81 明治女流文学集（一）』（昭和41年 筑摩書房）

故下田校長先生伝記編纂所『伝記叢書66 下田歌子先生伝』（1989年 大空社）

鳥居美和子『教育文献総合目録 第3集 明治以降教科書総合目録Ⅱ 中等学校篇』（昭和60年 小宮山書店）

山崎明子『近代日本の「手芸」とジェンダー』（2005 世織書房）

広島大学図書館 教科書コレクション画像データベース

http://dc.lib.hiroshima-u.ac.jp/text/list/school_systems/41?o=380

（いづも としえ：文学部 日本語・日本文学科 教授）